

2009年11月21日LS入試問題出題趣旨・講評

## 問題 I

出典 藤原正彦『遙かなるケンブリッジ』（新潮文庫、1994年）31頁～35頁、文章（2）は植松正「公平の錯覚」ジュリスト678号（1978年）10頁、文章（3）は我妻栄『法律における理窟と人情』（第2版）（日本評論社、1987年（初出1955年））6頁～14頁

## 採点講評

3つの文章は、それぞれ「fairであること」や「公平であること」について論じている。「fair」は、わが国では「公平」と訳されているにもかかわらず、文章（1）では文章（2）では、「fair」と「公平」の意味内容が大きく異なっている。

また、文章（2）と文章（3）では「公平」について論じられてはいるが、「公平」を論じる文脈が両者では大きく異なっている。すなわち、文章（2）では、「公平」以外の物差しの必要性が論じられているのに対して、文章（3）では、杓子定規こそが「公平」を実現するための有効な手法であることが強調されている。ここで議論すべき問題は、「ルールによる公平性の確保」についていかに考えるかという点であって、似たような事例は我々の身の回りでもしばしば目にするところであろう。

したがって、問4では、日常経験する「ルールと公平性」ないしは「規則と公平性」についての具体的な事例を挙げて書いてそれを分析して欲しい。しかし、問3では、本文の例を単に引き写すだけでなく、（2）と（3）の本質的な違いはどこにあるのか、あるいはないのか、という点について両筆者の考えを比較しなければならない。この点で、問3については、表面的な理解にとどまっている答案が目立った点は残念であった。

## 問題 II

出典 文章（1）：辻井喬＝上野千鶴子『ポスト消費社会のゆくえ』（文藝春秋社、2008年）292頁3行目～299頁末、文章（2）：吉見俊哉『ポスト戦後社会』（岩波書店、2009年）iv頁9行目～viii頁14行目、文章（3）：鴻上尚史『「空気」と「世間』』（講談社、2009年）186頁9行目～188頁11行目

採点講評 我々がどのような時代に生きているのか。集団主義的に高度成長を成し遂げた日本が、「私」至上主義的な異議申立やグローバリゼーションの波により変化せざるを得なかったが、視点の違いからその評価や見通しは定まらない。我々はそのような、羅針盤なき時代を生きている。では何が変わったのか。3つの文章の4人の識者の視点は微妙に異なる。その異同を的確に捉えた上で、自分なりの分析を示すこと

を求め、受験生に、大きな意味での「社会科学」的な発想方法の萌芽があるかどうかを試したのが本設問である。問題Ⅰがオーソドックスな分、こちらはやや虚を突かれた感があったかもしれない。

また、最初の文章が対談であるのも特徴的である。対談は、全く立場の異なる2者や、一方が他方の主張に専らうなずくだけのことが多く、取り上げることには勇気があるが、本書は、議論の水準も比較的高く、意見の異同も適度ということから、取り上げる価値を感じたものである。

問1は、辻井と堤の立場を区別して、なぜ上野は堤にのみ共感するのかを説明すべきところ、ほぼできた者と全く設問を理解していない者との二極分化していた。問2は、辻井の立場を答えるべきところ、読みやすい上野に代弁させてしまい、設問の趣旨に合わない解答が目立った。問3では、「なぜ」と「どのように」が問われたにも拘わらず、現象の説明に終始して、若者が「夢」を終えなくなった点の指摘が殆どなかった。このため、得点が低い。問4も全体に出来が悪く、上野がこの種の組織の普遍的問題とするのに対し、鴻上がこの時代の日本特有の現象とする点はあまり指摘がない。問5は、文章を読まないで、オウム＝原理主義という一般的なレッテルを貼ったり、文中の語は使ったものの、文脈や著者の意図を踏まえなかったりした者が多い。問6は、そもそも1980年代の事件が挙がらないことが多い上、単なる社会主義の敗北や、バブル景気とその破綻による経済の混乱を挙げた例が多い。これでは、その前後で何がどう変化し、それが各文章の主張とどうシンクロするのかはわからない。プラザ合意、国鉄民営化、グリコ・森永事件、ファミコンの普及などを挙げた答案に高得点が目立った。

複数の文章を読み、両者の主張の異同を説明するなどは、法科大学院入試では頻出かと思われる。また、現代がどういう時代で、何がどう変化し、何が問題となっているのかについて、地球温暖化や中国の存在感といったよくある論点ばかりでなく、広く深く考えて欲しいものである。また、一部に紋切り型の観念論に基づく答案（つまり、本文をあまり読んでいない）があったが、法科大学院は一般にその種の「拳の固さ」ばかりを誇ることは求めていない点は留意して欲しい。